



薬学部だより

徳島大学薬学部
December 2023

Vol. 33

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Tokushima University

薬学部

巻頭言

■ 薬学部創立100年を迎えて



徳島大学薬学部長

土屋浩一郎

Tsuchiya Koichiro

令和5年11月3日に薬学部創立100周年記念事業を滞りなく開催することができました。この事業に関わって頂いた全ての皆様に、この紙面を通じ厚くお礼申し上げます。

さて、今回の薬学部だよりでは、100周年記念式典の準備を通じて徳島大学薬学部について改めて気づく点がありましたので述べてみたいと思います。

本学部は長井長義博士の進言によって設立されたことは周知の事ですが、同時期に長井博士は本学部以外にも富山薬学専門学校（現在の富山大学薬学部）、熊本薬学専門学校（現在の熊本大学薬学部）の専門学校から国立への昇格、神田薬学校（後の明治薬科大学）、東京薬学専門学校（後の東京薬科大学）の昇格に尽力されました。

本学部以外の施設は医学が基盤となり設立されましたが、本学部の前身である徳島高等工業学校応用化学科製薬化学部はその名の通り、工学を基盤とする点が特徴でした。すなわち、設立当時から、優秀な技術者の養成、その養成に関わる人材の育成を目指して発足したことになります。これを今の言葉に直すと、優秀な薬学研究者、創薬・製薬技術者、そしてそれらの人材を教育することのできるアカデミアの育成が、本学部の真髄と言えます。

また100年前の薬学は、医学に付属する分野という認識が専らでしたが、長井長義博士は薬学を医学から独立させることが日本の薬学発展に繋がるという考えのもと、医薬分業を強く訴え、現在に至っています。

本学部では2021年度からの新6年制ではこれらの視点から、医療を理解し、創薬・製薬に貢献できる薬学研究者・教育者を育成する創製薬科学研究者育成コースを、高度な基礎力と研究マインドを持ち、指導的役割を担う薬剤師を育成する先導的薬剤師育成コースの設立につながっています。

2011年に長井長義博士の評伝映画「こころざし-舎密を愛した男」が完成し、その中では博士が志を抱いて長崎に医学修行に出発したこと、化学に対する志を深めたドイツでの研究生

活、また日本に帰国してからも日本の薬学の発展に心を砕かれたことが描かれています。この映画のタイトルに「こころざし」という言葉を含めた理由は、長井長義博士が志を抱いて日本の薬学の発展に取り組まれたことに基づいていますが、今回の100周年事業に当たり、薬学部まつわる多くの資料に触れ、また既に社会の第一線を退職された卒業生の方と言葉を交わさせていただいた中で、いまから100年前の長井長義博士の郷土を愛する気持と、日本の薬学の方向性への強い信念が徳島大学薬学部の基本になっていることに改めて気づくことができました。

今回の創立100周年を迎えるに当たり、私どもは「志」あるインタラクティブ YAKUGAKUJIN の輩出を重ねて…徳島大学 薬学部…次の100年へ」というスローガンを掲げました。

昨今、新規感染症やがんに対する治療薬、さらには抗老化薬などの生活改善薬等、薬に寄せられる期待はこれまで以上に高まっています。わたしたちは、今まさに原点に回帰すると共に時代に合った改革を進め、薬が関係する諸分野に於いて名実ともに国内外に存在感を示していくことが、次の100年への役割だと考えています。

薬学部創立100周年記念式典等実施報告



生薬学分野 准教授

田中直伸

Tanaka Naonobu



臨床薬学実務教育学 教授

阿部真治

Abe Shinji



生物薬品化学分野 教授

篠原康雄

Shinohara Yasuo

徳島大学薬学部は大正11年徳島高等工業学校応用化学科・製薬化学部として発足してから令和5年に創立100周年を迎えました。その記念として、令和5年11月3日、薬学部創立100周年記念式典・記念講演会・記念祝賀会及びホームカミングデイを実施しました。ホームカミングデイには、合わせて26名の卒業生にご参加いただき、薬学部長井記念ホールにて行われた「薬学部創立100周年記念式典・記念講演会」では、オンラインを含め約178名の方にご参加いただきました。その後阿波観光ホテルにて記念祝賀会を行い、各会とも盛会となりました。

以下に、その概略をご報告いたします。

<ホームカミングデイ：田中 直伸>

薬学部創立100周年記念式典の挙行にさきかけて、午前中にホームカミングデイを実施しました。11月とは思えないくらいの暖かな日差しのもと、昭和37年卒から平成17年卒までの26名の卒業生をお迎えし、担当教員が2002年に改修された茶色の研究棟と教育棟内の各所や、薬学部の周辺をご案内しました。その後、卒業生の皆様には第一講義室で「薬学部のあゆ

み ホームカミングデイ版」の動画を視聴していただきました。

ご案内中には、卒業生の皆様とそれぞれの学生時代の思い出を楽しく共有することができました。また、蔵本地区の新旧の飲食店をまとめたランチマップをご用意し、大変好評をいただきました。

<記念式典・講演会：阿部 真治>

記念式典では、土屋浩一郎薬学部長、河村保彦学長、薬友会の水口和生会長よりご挨拶がありました。引き続き、ご来賓の文部科学省高等教育局医学教育課の依幸嗣課長、徳島文理大学の今川洋薬学部長、松山大学の山口巧常務理事・副学長からご祝辞をいただきました。記念式典終了後、薬学部100年の歩みをまとめた動画を上映した後に、記念講演会を開催いたしました。記念講演会では、日本薬学会会頭である東北大学大学院薬学研究科・薬学部の岩淵好治研究科長・学部長より、「薬学の原点と未来への展望」というご演題で、薬学の過去・現在・未来について、ご自身の研究フィールドからの視点も交えご講演いただき、盛況のうちに終了いたしました。ご参加いただいた方々に心より御礼申し上げます。

<記念祝賀会：篠原 康雄>

祝賀会は徳島駅前の阿波観光ホテルで開催され、ご来賓や卒業生、教職員合わせて82名が出席、和気あいあいとした雰囲気で行われました。会は小暮教授の進行で進められ、まず篠原が開会の辞を、次いで土屋学部長による挨拶が行われました。続いて藪内洋一薬友会理事、佐藤耕治前薬友会近畿支部長よりご祝辞を頂き、香美祥二徳島大学病院長による乾杯のご発声で開宴となりました。歓談の間にも、山内あい子名誉教授、鳥取 桂前薬友会会長、久米哲也薬友会徳島支部長から、薬学部の思い出話をご披露頂きました。北河修治元講師（前神戸薬科大学長）もご出席下さり、「見上げてごらん夜の星を」の歌声をご披露下さいました。2時間ほどの祝宴はあっという間に閉会の時間を迎え、楠見武徳名誉教授による万歳三唱で締めくくりました。

最後に、今回のこの紙面を借りまして、徳島大学薬学部創立100周年記念事業にご協力・ご支援いただいた皆様に薬学部教職員一同心より御礼申し上げます。

薬学部長 土屋 浩一郎

薬学部創立100周年記念事業

実行委員長 小暮 健太郎



後輩へのメッセージ

■ 自問自答を通じて夢の実現に近づこう



大塚製薬株式会社
創薬化学研究所 研究員

宮島 凜

Miyajima Rin

皆さんの将来の夢は何ですか？私は高校生の時に「たった一つの革新的な新薬が何百万もの患者さんを救うことができる」という言葉に心動かされ、新薬創出に携わる研究者になることを夢見ました。徳島大学薬学部入学後もその夢を追いつけ、念願叶って2016年4月に現職に就くことができ、現在では自分達が手掛けた化合物

を医薬品として世界中の患者さんに届けるべく日々奮闘しています。

さて、今回皆さんへメッセージを贈る機会を頂きましたので、将来の夢の実現に近づくために皆さんにも是非行って欲しいことを書きたいと思います。それは「自問自答→行動」です。「将来したいことは何か」、「なぜそれをしたいのか」、「夢を実現するためにはどうしたら良いか」について自問自答する時間を取って欲しいなと思います。そして、できれば回答内容を書いてみてください。書き起こすと考えが整理され、自分の夢や課題の解像度が高くなります。そうすると、次に取るべきアクションが見えてきます。あとは行動に移すのみです。私は社会人になってからも自問自答を続けています。私は予てより、日々進歩し競合の激しい創薬研究の世界に身を置く者として、世界で闘える研究者になりたいと考え、博士号取得を目標の一つとしてきました。そこで、恩師の大高先生に相

談し、2020年10月に社会人博士課程へ進学しました。働きながら学位取得のための研究を進めるため、多くの苦難を伴いましたが、大高先生、そして家族をはじめとする周囲のサポートのおかげもあり、今年9月に修了できました。博士課程を通じて、発案力・論理的思考力・タイムマネジメント・共同研究先と研究を進める連携力など研究者に求められる力量を高められたと実感しています。このように「自問自答→行動」を繰り返すことで、夢の実現に少しずつ近づけると私は信じています。

在学期間は、自身の将来を自分の意思で自由に選べる期間です。時折、自身と向き合ってみて欲しいと思います。徳大薬には成長できる環境があります。皆さんの今後のご活躍を期待しています。

■ 薬学から異分野へ



鹿児島大学
学術研究院理工学域工学系 教授

松本 健司

Matsumoto Kenji

皆さんは、将来どうしたいですか？大学院進学や海外留学、創薬研究者、大学教員など様々な進路があるなか、薬剤師として働くことをイメージしているのだろうか？現代は私が学生だった約20年前とは大きく異なるため、皆さんが将来を考える参考になるか分からないが、せつかくの機

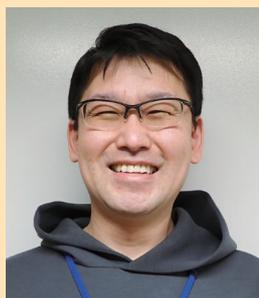
会を頂いたので、私の近況について書きたい。

私は、現在は薬学部を離れ、鹿児島大学工学部で有機化学の教育研究活動を行っている。2022年に着任したばかりで講義準備や会議に追われる日々を過ごしているが、これまでの薬学部での経験から何とかこなせているように思う。所属プログラムでは化学を基盤に物理化学や生物化学など幅広い分野を学ぶため、創薬に関心のある学生が多くいる。そこで1年生の初回講義では、制酸剤（重曹・水酸化Mg等）が中和反応という高校の知識で理解できること、アスピリンの副作用とバファリンの名前について話をする。なんとか有機化学に興味を持ってもらうために薬学の知識をフル活用しているのが現状だ。研究面では有機合成化学の基礎研究に取り組んでおり、研究室の学生が楽しく活動し成長できる環境を一歩ずつ整えている。

私は、4年生の研究室配属の時、新藤充先生（現・九州大学）からご指導いただいた。実のところ最初は就職（薬剤師）を考えていたが、優秀な先輩や後輩がおり、また親身に話を聞いていただくなかで徐々に気持ちが変化し、博士課程に進学した。キツイ時も多々あったが、楽しく過ごせた印象の方が強い。もちろんその当時、鹿児島に来るなんて思いもよらない。多数の公募にだす中で、幸運にも現職に採用いただいた。まだ手探りの状態だが、薬学の知識や薬学部での経験が異分野に挑戦する上で役立っている。このような将来・キャリアもあるので、薬学生の皆さんには国試にとらわれず広く学び、ぜひ研究にも没頭してほしい。先行きの読めない現代だからこそ広い知識と研究マインドの涵養が大切だと思う。皆さんの今後のご活躍に期待しています。

研究紹介

■ “有機化学” に拘ったタンパク質の機能解明研究



機能分子合成薬学分野 助教

傳田 将也

Denda Masaya

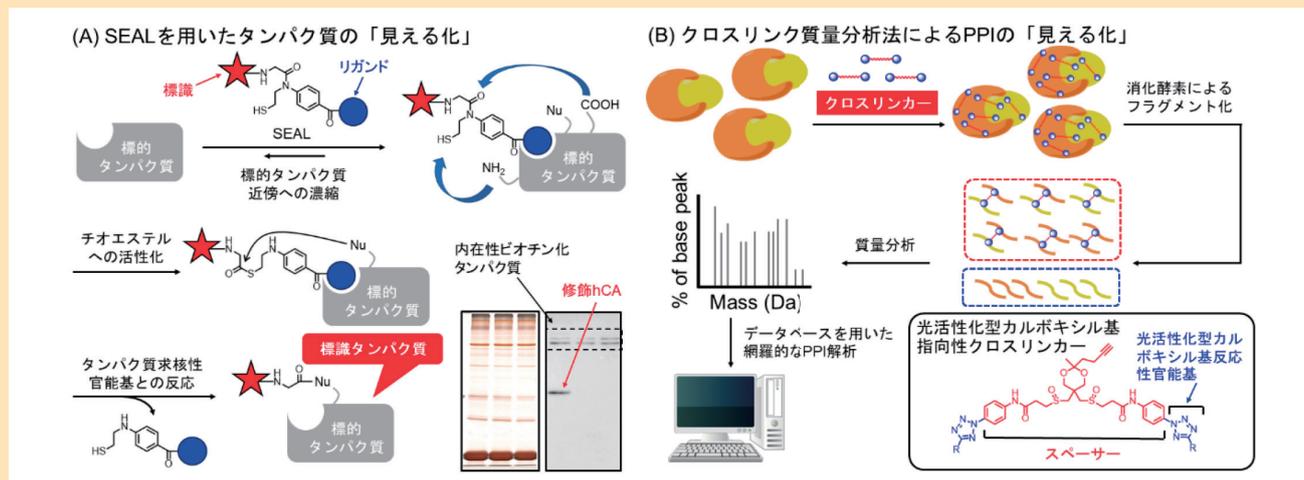
宇宙の観察、探索手段と言えは何かを思い付きませんか？望遠鏡を使うという人も居るでしょうし、ロケットで実際に行くという人も居るかもしれません。生物もまた未だ解明しきれていない「無限の宇宙」だと考えることが出来ます。このため、それら生物内で働くタンパク質の機能解明は、生物という宇宙を理解するための重要な研究テーマの一つです。そこで我々は、望遠鏡ではなく「有機化学」という道具に拘ってタンパク質の機能解明を介した生物の理解を目指した研究を行なっています。

生物を構成するキープレイヤーの一つであるタンパク質は、細胞内局在変化や他のタンパク質との相互作用 (PPI) を通して機能を発現します。そこでまず我々は、タンパク質の局在変化を「見える化」する技術開発に取り組みました。私の所

属する機能分子合成薬学分野では、N-sulfanylethylamide (以下 SEALide) という“有機”化合物を開発しています。SEALide は、通常、求核反応に安定なアニリド型として存在しますが、リン酸塩などの酸-塩基触媒が一定濃度以上になると求核反応が可能なチオエステル型へ活性化されます。私は、この特徴を利用することで、世界初の標的タンパク質近傍で活性化可能なタンパク質「見える化」試薬が開発可能だと考えました。すなわち、タンパク質表面にはカルボキシル基やアミノ基など多数の酸性・塩基性官能基が存在することから、これも酸-塩基触媒と見なすことが出来ると考え、SEALide の標的タンパク質近傍への濃縮によるアニリド型からチオエステル型への活性化と、続くタンパク質求核官能基との反応により標的タンパク質選択的修飾が可能だと考えました。そこで、タンパク質を「見える化」するための蛍光色素などの標識とタンパク質と相互作用するリガンドを SEALide で連結した「見える化」試薬を合成し、SEAL (SEALide-based labeling reagent) と名付けました。SEAL は、想定通りリガンドを介して標的タンパク質近傍への濃縮後、チオエステル型への活性化と続くタンパク質求核官能基との反応によりヒト赤血球内で標的タンパク質 (hCA) 選択的修飾を達成し、標的タンパク質への結合により「見える化」を達成する世界初の試薬となりました (図(A))。

現在は、タンパク質-タンパク質間相互作用 (PPI) の「見える化」技術を開発しています。多くのタンパク質は PPI により機能を発現することから、PPI の「見える化」は生物の理解に重要です。近年、PPI 解析法として「有機化学」と「質量分析」を融合したクロスリンク質量分析法が脚光を浴びています。本法は、クロスリンカーと呼ばれる“有機”化合物で近接アミノ酸残基間に人工的架橋構造を構築後、架橋残基の質量分析情報から網羅的に PPI を解析する方法です。このためクロスリンカーが重要な役割を担うため、様々なタイプが開発されています。さてクロスリンカーは、アミノ酸残基と反応する「反応部位」を二つ持ちますが、これまでに開発されたものはリジン側鎖アミノ基を標的とした N-ヒドロキsuccinimid (NHS) エステルが一般的でした。そこで我々は、照射により活性化後、アスパラギン酸やグルタミン酸側鎖のカルボキシル基と反応する世界初のクロスリンカーを開発すべく研究を行っています (図(B))。本クロスリンカーは、これまで未知であった PPI を解析可能にすると確信しています。

二つの「見える化」開発を紹介しましたが、我々は「有機化学」の無限の可能性を信じ、これを用いたタンパク質の機能解明研究を行っています。これら研究に興味がある学生さんは、是非研究室に遊びに来てください。



令和5年度オープンキャンパス実施報告

薬学部入試広報委員

笠原 二郎

Kasahara Jiro

令和5年度の薬学部オープンキャンパスは、8月7日（月）10:00-12:00に開催しました。昨年度同様、長井記念ホールを主会場にした対面およびオンラインのハイブリッド形式にて、対面参加者（主に高校生）256名、同伴者148名（第1講義室、スタジオプラザ）、オンライン参加者466名の、計870名が参加しました（対面参加人数を大きく制限した昨年度に比較して200名増加）。学部や入試制度の説明、動画による学内施設や講義内容と課外活動等の紹



土屋薬学部長の挨拶と満席の長井記念ホール

介、そして学部1年生、6年生、博士課程大学院生による体験紹介を実施した後、質問コーナーと個別相談会を設けました。

当日は、会場からもオンラインでも多くの質問を頂き、また実施後に集計した参加者アンケート結果からは、特に学部の紹介や学生による体験



体験紹介の学生も交えて実施した質問コーナー

紹介が、きわめて好評でした。実施にあたりご尽力頂いた、入試広報委員会の諸先生や学務系の皆様ほか、ご協力下さった方々に心から感謝申し上げます。オープンキャンパスは、来年度以降も引き続き本学部のPRに大きく貢献することが期待されます。

薬用植物園一般開放の開催について

薬用植物園 園長

田中直伸

Tanaka Naonobu

薬用植物園では11月6日（月）から10日（金）の5日間、植物園の一般開放を実施しました。本園では、一般の方を対象とした開放を秋の恒例行事として実施し、大変好評をいただいております。新型コロナウイルスの流行により、近年は開催を見合わせていましたが、今回4年ぶりの再開がなりました。

初日と最終日はあいにくの雨模様となりましたが、テレビや新聞など複数の報道機関による報道の助けもあり、近隣の住民のみならず、本学の学生や教員（他学部を含む）、他大学の教員、高校教員、薬剤師など県内外から薬用植物に興味をもつ約700名の皆様に、秋の装いの植物園を楽しんでいただき



ゲンノショウコを観察する来園者

ました。

薬用植物園では、約10,000m²の圃場をテーマ別に10の区画に分け、漢方処方構成生薬の基原植物などの薬用植物や、県内外の絶滅危惧植物など約700種の植物を維持栽培しています。この中から、種子がお茶（ハブ茶）として使われるエビスグサや、長井長義博士がエフェドリンを単離したシナマオウ、野生絶滅種コブシモドキ、可憐な花をつけた絶滅危惧植物ツメレンゲなどをピックアップして、来園者にご案内しました。

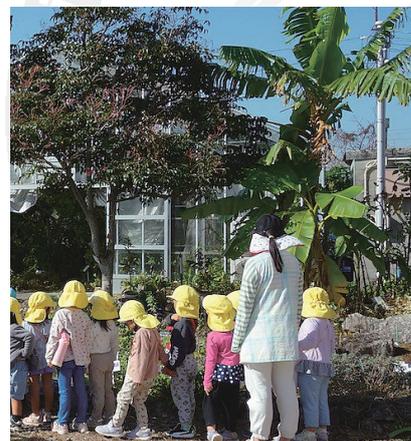
神農本草経の生薬を常設展示する研修舎内では、「薬草茶で健やかに」と題して、種々の薬草茶の情報や使用における注意を記したパネル展示と、薬草茶の試飲を実施しました。当初は、15時からこの試飲を実施する予定でしたが、リクエストを受け常時実施することとしました。来園者のみなさま



薬草茶の展示と試飲コーナー

には、日本の三大民間薬として有名なドクダミ、ゲンノショウコ、およびセンブリのお茶など、日替わりで7種の薬草茶と、園内のハーブで作る温かいフレッシュハーブティーを楽しんでいただきました。

薬用植物園では、今後も一般開放を継続して実施することで、地域の皆さまとの交流と社会貢献活動を行なって参りますので、ご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。最後に、本開放の実施にご協力いただいた本学部事務職員の方々と、薬草茶の試飲の準備や園内の案内、交通整理を献身的に行なってくれた生薬学分野の学生諸氏に感謝いたします。



近隣の保育所からの来園

新任教員挨拶



薬物治療学分野 教授

金 沢 貴 憲

Kanazawa Takanori

令和5年7月1日付で、大学院歯薬学研究部 薬物治療学分野の教授を拝命致しました、金沢貴憲（かなざわたかのり）と申します。私は、2006年に東京薬科大学大学院薬学研究科を修了後、同大学にて助教・講師、2017年より日本大学薬学部にて専任講師、2020年より静岡県立大学薬学部にて准教授として、主に薬剤学を専門とする薬学教育ならびに難治性疾患に対する核酸医薬の非侵襲的治療システムの開発に関する研究に従事してまいりました。その間、2010年に博士（薬学）を取得し、2014年から1年間、米国ノースイースタン大学

（Torchilin 教授）にてがんに対する核酸ナノ医薬の開発研究に従事する機会をいただきました。今後は、本学6年制薬学教育に主体的に取り組むとともに、難治性疾患・希少疾病に対する新たな医薬モダリティとして期待される核酸・遺伝子・細胞材料に着目し、これらを薬として臨床へ届けるための適正な薬物治療システムの開発研究を推進し、臨床ニーズを理解して創薬・薬物治療のできる高い研究マインドを持った薬学研究者・薬剤師の育成に全力を尽くす所存です。皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、宜しく願い申し上げます。

退任教員挨拶



生物薬品化学分野 助教

伊 藤 剛

Ito Takeshi

2023年6月末に徳島大学を退職し、7月より愛媛大学大学院農学研究科の助教に着任いたしました伊藤剛と申します。徳島大学にはコロナ渦の2020年10月に、ポスドク先の米国・レンセラー工科大学より2週間の待機期間を経て赴任し、先端酵素学研究所の助教に着任いたしました。当時は新型コロナウイルスの感染拡大防止のための対応等、非常に難しい状況でしたが、篠原康雄教授が主宰される蛋白質発現分野（生物薬品化学分野）に温かく迎えていただきました。同年11月に薬学部の助教を兼務させていただくことになり、教育と研究に携わる中で、大学教員としてかけがえのない経験を数多く積むことができたと思いま

す。振り返ってみますと、徳島大学で過ごさせていただいた期間は2年半ほどと、とても短い間ではございましたが、篠原康雄教授をはじめ、教職員の皆様には大変お世話になり、誠にありがとうございました。また、研究指導を通して学生と共に切磋琢磨し、成果もまとめることができましたことは大変嬉しく思います。愛媛大学では、農学の領域で引き続き生命科学の教育・研究に携わります。いわゆる農芸化学という薬学とも関係の深い分野でございます。徳島大学での教育・研究経験を糧に、今後も精一杯、精進して参ります。これからもご指導とご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしく願い申し上げます。

薬学部創立100周年記念「長井長義と薬学部」展の開催



ガレリア新蔵展示室運営委員会副委員長・神経病態解析学分野 准教授

笠 原 二 郎

Kasahara Jiro

徳島大学ガレリア新蔵展示室（新蔵キャンパス・日亜会館1F）では、令和5年10月21日（土）から令和6年3月9日（土）まで、第33回企画展「長井長義と薬学部」展を開催しています。徳島市常三島町に出生し、本学部の前身たる徳島高等工業学校応用化学科製薬化学部の設立に多大な貢献をされた「日本の薬学の祖」長井長義博士の生涯と功績を、本学部が所蔵する貴重な資料や写真などで振り返るとともに、本学部100年の学び舎と研究室及び教員の変遷史、現在の薬学部構成分野と研究センター、ユ

ニークな教育内容や国際交流などについて、パネル等で紹介しています。開催期間中のご来場をお待ちしております。本展の展示資料作成に際してご協力頂いた教職員の皆様に、心より感謝申し上げます。

本展は、徳島県内ケーブルテレビ「けーぶる12(121ch)」で放映される30分番組「テレビミュージアム」にて、令和5年11月29日（水）から令和6年1月27日（土）の期間、毎週水曜7時45分と12時45分および毎週土曜13時30分から紹介されますので、是非ご覧ください。

学生の活躍

国際学会 AIMEC2023に参加して



機能分子合成薬分野 博士前期課程1年

篠崎 千穂

Shinozaki Chiho

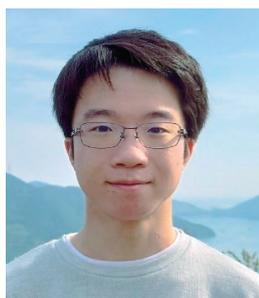
2023年6月25～28日、韓国ソウルにて開催された Asian Federation for medicinal chemistry International Medicinal Chemistry Symposium 2023 (AIMECS 2023) に参加しました。本国際会議では医薬品の創製に携わる研究者の方々がアジア各地から参加します。私は“Study on lipidated anti-cancer peptide allowing long-lasting duration in mice model”と題して研究成果をポスター発表しました。発表に際し、英語の原稿や質問対応などの対策をいたつもりでしたが、私自身あまり英語が得意ではないということもあり、上手く話すことができませんでした。しかし、質問者の方々が簡単な英語に言い換えて質問してくださったり、

ジェスチャーを使ってくださったりととても優しく対応して下さいました。今回の経験を通して、日本語だけでなく英語で伝えることの大切さをとても感じ、自身の英語力の向上にも努めたいと感じました。

また、今回は現地開催ということもあり、現地ならではの経験もたくさんさせていただきました。日本とは食事や文化も違って、隣の国とはいえ外国であるということを感じるととても素敵な機会でした。

最後になりましたが、今回発表の機会を与えてくださった大高章教授、お世話になった学会の先生方、旅費をご支援いただきました徳島大学薬学部にご心より感謝いたしております。

実務実習を終えて



薬学部薬学科5年

近藤 宏祐

Kondo Kosuke

このたび私は、ありす調剤薬局蔵本1丁目店と徳島大学病院にて実務実習をさせていただきました。

ありす調剤薬局蔵本1丁目店では、基本的な調剤手技を習熟するだけでなく、患者さんと真摯に向き合うことの重要性を強く実感しました。信頼関係を築くことができれば、患者さんは色々なことを教えてくださいます。患者さんが抱える問題とその背景を把握し、一人一人の患者さんに合った指導・提案をするためにはこの信頼関係が不可欠です。

徳島大学病院では、薬剤部における多様な業務を経験させていただきましたが、なかでも病棟業務での経験が強

く印象に残っています。病棟では主にがん患者さんを担当させていただき、初回面談・薬剤説明のほか、副作用の評価に基づいた減薬や支持療法の提案などの高度薬学管理を体験しました。薬剤師の判断がすんなりと医師に受け入れられ治療内容が変更されることや、医師や看護師から薬剤に関する相談を受けることも多々あり、チーム医療における薬剤師の存在意義と責任を実感しました。

私にとって、実務実習は自身の薬剤師としての在り方を考える良い機会となりました。後輩のみなさんが、少しでも前向きな気持ちで実習に取り組まれることを心から願っています。



薬学部薬学科2年
薬学硬式テニス部 部長

上野 壮悟

Ueno Sougo

私たち薬学硬式テニス部には現在、1年生男子4名、1年生女子2名、2年生男子3名、2年生女子2名が所属しており、水曜日の夜と日曜日の午前中の週2回活動しています。経験者はもちろん、大学からテニスを始めたという人もたくさんおり部員みんなで楽しく活動しています。

今年度は新型コロナウイルスの影響も弱まってきたため、新歓キャンプやOB戦など、昨年度まではあまり活発に行えなかった行事を開催することができました。またこれらの行事は、お忙しい中たくさんの先輩方にお集まりいただき、現役部員と先輩方の交流が

深まり有意義な時間となりました。

もちろん学生の本分は勉学ではありますが、この部活に所属し活動することで尊敬できる先輩や大切な仲間に出会うことができ、勉強だけでは経験できなかったであろう重要なことを学ぶことができました。

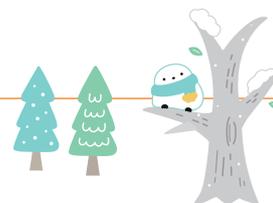
最後になりますが、いつも私たちの活動を支援し、応援してくださっている皆様、本当にありがとうございます。今後とも薬学硬式テニス部の良い伝統をしっかりと引き継げるよう、改めて気を引き締めて精進していきたいと思っております。よろしくお願いたします。

サークル紹介

薬学部関連ニュース

教員の異動

令和5年6月30日付退職 生物薬品化学分野 助教 伊藤 剛
令和5年7月1日付採用 薬物治療学分野 教授 金沢 貴憲



学会賞等受賞

【教員の受賞】

■徳島県科学技術大賞
若手研究者部門

受賞者：稲垣 舞
受賞年月日：令和5年11月9日
表彰団体名：徳島県
受賞内容：活動成果

■徳島県科学技術大賞
科学技術振興部門

受賞者：南川 典昭
受賞年月日：令和5年11月9日
表彰団体名：徳島県
受賞内容：研究成果

■徳島県科学技術大賞
科学技術振興部門

受賞者：小暮 健太郎
受賞年月日：令和5年11月9日
表彰団体名：徳島県
受賞内容：研究成果

【学生の受賞】（学年は受賞時）

■第21回国免疫フォーラム奨励賞

受賞者：城 裕己 (D3)
受賞年月日：令和5年6月3日
表彰団体名：四国免疫フォーラム
受賞内容：Cathepsin Dは小胞体内腔でCLN6の凝集抑制機能を支える

表彰団体名：日本薬学会薬理系薬学協会
生体機能と創薬シンポジウム2023

受賞内容：Arachidonic acidおよび2-arachidonoyl glycerolによるcyclooxygenase-2分解促進作用

表彰団体名：徳島大学大学院医歯薬学

研究部
受賞内容：Precise peptide/protein modification on tryptophan using S-protected cysteine sulfoxide

■AFMC International Medicinal Chemistry Symposium (AIMECS) 2023 Best Poster Presentation Award

受賞者：篠崎 千穂 (M1)
受賞年月日：令和5年6月28日
表彰団体名：AIMECS2023
受賞内容：Study on a lipidated anti-cancer peptide allowing long-lasting duration in mice model

■口頭発表 優秀発表賞

受賞者：常松 保乃加 (D3)
受賞年月日：令和5年8月26日
表彰団体名：次世代を担う若手のための創薬・医療薬理シンポジウム2023

受賞内容：藍含有成分はendothelin-1発現を制御して肺動脈血管リモデリングを形成させる

■JSSX Best Poster Award

受賞者：矢田 浩晃 (B4)
受賞年月日：令和5年9月29日
表彰団体名：日本薬物動態学会
受賞内容：Glucose transporter-mediated transport of newly synthesized creatine analog in human blood-brain barrier endothelial cells

■優秀発表賞

受賞者：常松 保乃加 (D3)
受賞年月日：令和5年6月24日
表彰団体名：第143回日本薬理学会近畿部会
受賞内容：藍葉含有成分による肺動脈血管リモデリング形成作用の検討

■第21回夏期セミナー優秀発表賞

受賞者：阿部 舜史 (B5)
受賞年月日：令和5年8月27日
表彰団体名：遺伝子デリバリー研究会
受賞内容：筋注後筋組織から血中に漏出した脂質ナノ粒子 (LNP) の体内動態に抗PEG IgMが与える影響

■優秀発表賞

受賞者：山本 舜人 (M2)
受賞年月日：令和5年10月20日
表彰団体名：第44回生体膜と薬物の相互作用シンポジウム
受賞内容：膜タンパク質搭載PEG修飾リボソームの脾臓辺縁帯領域から濾胞領域への送達による膜タンパク質に対する抗体誘導

■優秀発表賞

受賞者：村松 明美穂 (B6)
受賞年月日：令和5年7月22日
表彰団体名：第7回黒潮カンファレンス
受賞内容：ドキシソルピシン心毒性に対する漢方薬効果の検討

■遺伝子・デリバリー研究会
第22回シンポジウム奨励賞

受賞者：吉村 友佑 (M1)
受賞年月日：令和5年9月19日
表彰団体名：遺伝子・デリバリー研究会
受賞内容：イオンフォレシスによる核酸医薬の肝臓局所的な送達

■Young Investigator Award

受賞者：城 裕己 (D3)
受賞年月日：令和5年11月8日
表彰団体名：WORLD Symposium 2024
受賞内容：Ctsd integrity in the endoplasmic reticulum is required for cln6's anti-aggregate activity

■優秀ポスター発表賞

受賞者：三竿 颯也 (D3)
受賞年月日：令和5年8月25日

■Tokushima Bioscience Retreat
若手研究者奨励賞

受賞者：小林 大志朗 (D3)
受賞年月日：令和5年9月28日

※注釈：氏名の右横の（ ）内のアルファベットは、
B＝学部生、M＝博士前期課程、
D＝博士後期課程・博士課程を指します。

学部等支援基金(薬学部) ご寄附のお願い

薬学部は、職種にかかわらず多様な薬学領域の様々な分野に対応可能な人材「インタラクティブYAKUGAKUJIN」育成を教育理念とし、薬学の新たな未来の創造に貢献するため、教育研究活動を推進しています。このような取組を発展させるため、薬学部・薬学研究科における教育研究、国際交流及び社会貢献等の様々な活動に基金を活用させていただく予定です。皆さまからのご理

解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

●お申込み方法等、詳しくはホームページをご覧ください。



<https://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/foundation/>

発行：徳島大学

編集：薬学部広報委員会

広報委員：山崎哲男、藤野裕道、植野 哲、稲垣 舞

URL：<https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/>

〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1

徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係

E-mail：isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、令和6年7月頃を予定しております。